

神戸常盤大学における英語基礎知識の習得と その応用力向上を促す教材・教授法の開発

山崎麻由美

脇本 聡美

Leigh McDowell

本学では英語の運用能力を高めることがますます必要になってくるとされる。そのため、現時点での問題点を検証し、それを改善するために本学学生に適した教材、教授法を作る研究を実施した。

重点をおいたことは①学習に必要なモチベーションを高め、維持させること、②4技能（リスニング、スピーキング、リーディング、ライティング）をバランス良く伸ばすこと、の2点である。従来の市販のテキストで、「総合教材」という分野の市販のテキストは4技能をバランス良く学ばせるような工夫がみられるが、「これはリスニング」「これはライティング」と問題を分けた構成になっているものが多く、教員は使いやすいが、学生の興味を削ぎかねないものになっている。また、英語の基礎知識を定着させ、運用能力を向上させるためにも、4技能を分けない形での教材が望ましいと考えられる。

上記の2点を教材と教授法に反映させるために、留意すべきことは①Input と Output のバランスを崩さないこと、②学生に身近で興味を感じられるトピックに沿って学習していけることである。なおかつ、4技能別の問題を課さないようにするためには、学生に提示する際にひとつの技能に絞り、そこに残りの3技能をうまく集約することが一番効率的だと思われた。

そのため、ライティングを中心に据えることにした。理由としては、①ライティングが学生の最も苦手とする分野であること、②書くための準備でリーディングとリスニングを包括できること、③授業内でグループ学習から個人学習への移行するにあたって、4技能の内ではライティングが一番スムーズに実施できること、④ライティングの Fluency を向上させることによって、スピーキングにも応用できること、そして、最大の理由として⑤ライティング・スキルは自学のみではなかなか向上させるのが難しいことである。

方法論としては、リーディングからグループでのライティング（これはブレインストーミングの目的だけでなく、弱い学生を他の学生が引き上げるという狙いもある）、そして個人のライティングと教員側からのフィードバックである。更に自分の書いたものの間違いを見つけ、それを正して再度書き直す姿勢も身につけさせたいと考えた。

この方法を使つての今後の課題は、フィードバックをどのようにするかという点と評価をどうするかである。特にライティングの評価は到達点をどこに置くか、そして何を評価するかなど非常に難しい問題を含んでいるため、更に検証および検討をしていくことが必要である。